地域で生活する精神障害当事者への支援に関する体験型学習による教育方法の検討

蔵本　　綾（医学部助教）
渡邉　久美（医学部教授）

1. はじめに

2004 年に厚生労働省より提示された「精神医療保健福祉の改革ビジョン」において、「入院医療から地域支援へ」という方策が明示された。また、2017 年には「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会報告書」の中で、精神障害の有無や程度にかかわらず、誰もが安心して自分らしく暮らすことができるよう「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築」が提示されている（厚生労働省、2017a）。こうした流れを受けて、精神障害者の地域生活支援の充実は、近年の精神科医療・看護における課題である。

同様に、看護師教育においても、病院内での看護に留まらず地域での精神看護に関する学習が求められている。学士課程における看護師教育のあり方を提示した看護学教育モデル・コア・カリキュラム（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会、2017）においても、「心のケアが必要な人々への看護実践」（図 1）のなかで、地域生活支援について述べられている。特に該当するのが「⑩精神疾患を持つ人の地域生活支援について、関係者と協同する必要性と方法を説明できる」の部分である。また、同カリキュラム内の「多様な場における看護実践に必要な基本的知識」では「母子、高齢者、心身・精神障害児・者等を対象とした福祉施設（入所・通所）とその特性について説明できる」、「母子、高齢者、心身・精神障害児・者等を対象とした福祉施設（入所・通所）における看護の在り方と方法について理解できる」、「暮らしの場（在宅、施設等）や地域特性の違いによる看護の在り方と方法について理解できる」という項目もあり、地域生活支援に関するニーズの高さが伺える。

精神障害当事者にとっての地域生活の意味とは何であろうか。精神障害者への支援・看護において重要な概念の一つに「リカバリー」がある。1980 年代からアメリカの当事者によって使い始められたもので、「障害をもちながらも、希望を取り戻し、社会に生き、自分の目標に向かって挑戦しながら、かけがえのない人生を歩むこと」とされる（遠藤、2019、192 頁）。リカバリーは一朝一夕に得られるものではなく、浮き沈みを繰り返すプロセスであり、「その人らしさ」を獲得していくプロセスともいえる。「その人らしさ」は当事者のみで築けるものではなく、社会の中での様々な経験を通じて獲得していくものであり、そのリカバリーのプロセスにおいて、当事者の地域での居場所や働く場所は重要な役割を果たしているのである。

本学医学部看護学科では、精神看護に関する講義は2年後期までに終え、3年後期に臨地での実習を行うカリキュラムとなっており、卒後には看護師・保健師・養護教諭として勤務する学生が大半である。看護職として勤務するにあたり、精神障害者支援に関する施設や事業所についての知識を有していなければ、病院と地域（学校も含む）とのシームレスな看護の提供は困難である。しかし、地域生活支援においては「医療･看護」よりも「福祉」の割合が大きく、病院での看護を中心に学ぶ看護学科の学生においては、教科書等での机上の学習では、地域生活支援に関する具体的なイメージを持ちにくいのが実際である。

そこで、施設･事業所等に学生が実際に訪問し、スタッフから説明を受け、利用者の活動･作業の様子を見学することが、精神障害当事者およびその家族への支援に関する学習を促すのではないかと考えた。2019年度から看護学科2年生が各事業所等に実際に足を運ぶ「訪問プログラム」を実施し、2020年度も新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）流行の中ではあるが、各事業所等の協力により実施できた。学生のレポートを振り返り、一定の学習効果が得られたと考えられるため報告する。

論文内で学生のレポートから抜粋して記載しているが、倫理的配慮として、学生には、個人が特定できない形で公表することをレポート課題提示時に説明し、同意を得た。各事業所には、他の事業所と共に実名での事業所名の表記を行うことを説明し、原稿を読んだ上で公開許可を得た。

①心の健康の概念について説明できる。
②ライフサイクル各期における発達課題と心の危機的状況について説明できる。
③家庭・学校・職場等におけるメンタルヘルス向上のための支援について説明できる。
④周産期の母親と家族のメンタルヘルスを保ち、子どもの健康な心の発達を促す支援について説明できる。
⑤発達障害を早期にアセスメントし、適切な環境を提供する支援について説明できる。
⑥自殺予防のための本人及び関係者への支援について説明できる。
⑦依存症を持つ人とその家族への支援について説明できる。
⑧精神疾患のリスクを早期にアセスメントし、早期から適切な治療を受けるための支援体制について説明できる。
⑨精神疾患を持つ人の入院中から退院支援までの回復の段階に応じた看護を理解し、指導の下に実践できる。
⑩精神疾患を持つ人の地域生活支援について、関係者と協働する必要性と方法を説明できる。

図1　看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおける「心のケアが必要な人々への看護実践」の学修目標

2. 訪問プログラムの目的・実施手順

2－1. 訪問プログラムの目的

訪問プログラム実施の目的は以下の通りである。学生・事業所双方に事前に提示した。

(1) 就労継続支援A型･B型事業所、就労移行支援事業所、地域活動支援センター等の概要、及び国の施策や香川県内（高松市、三木町等）の動向や現状を知り、看護の立場から課題を見出す。

(2) 精神障害者、知的障害者への就労・地域生活支援の意義について、現場のサービス管理責任者、生活支援員等の支援者の講話から、考察する。

(3) 施設概要を他のメンバーと協力し学年全体に伝える機会を通して、プレゼンテーション能力を養うとともに、一般の方への啓発活動に向けた技術を習得する。

2－2. 実施時期・方法

看護学科2年後期科目「精神援助論」講義内で、「精神障害当事者の就労支援について」という形で2コマ設け、臨地見学もしくは学内演習とした。

事前に各事業所の情報を提示し、学生の希望調査を行った。訪問事業所等の一覧を、各事業所の概要と合わせて表1に示す。香川県高松市内にある事業所が大半であるが、観音寺市内、丸亀市内の事業所も1箇所ずつ含まれている。

学生の希望調査後、「なるべく保健師志望の学生に来てほしい」といった事業所からの希望も考慮しつつ、各事業所に5～6名の学生が配属されるよう学内で調整を行った。2019年度に実施した際には全ての学生が現地に訪問できるように調整したが、2020年初頭から国内でも流行したCOVID-19の影響を考慮し、各グループ、臨地での見学者と学内演習者を半数ずつとした。臨地で見学する学生には、訪問予定日2週間前からの健康記録表への記載および確認を促し、訪問後も体調管理には注意することを説明した。学内演習においては、課題学習を行うこととし、基本的には臨地見学に配置された学生と話し合いのもとで、学生が自分たちで決めることを基本として、必要時は教員から課題案を提示して、学習を促した。

2020年11～12月に各事業所等に訪問もしくはリモートでの説明を受けた。日程については、事業所の場所・活動内容に応じて調整を行い、臨地見学の際には教員が1名帯同した。学内演習者は各自の質問等を予め訪問学生に伝えておき､終了後に情報共有をグループ間で行った。12月下旬に学内で学びの発表会を行い、プログラムを終了した。

2－3. 学内発表会の実施

学生に、資料作成について、訪問前に下記の内容を提示し、「後日、発表会を行うこと」を前提として、プログラムに臨めるようにした。

表１　学生に提示した事業所紹介（順不同）

種別	事業所名	概要
就労継続支援B型事業所	らいおんハート	農業と福祉の連携に取り組まれています。独自に利用者の能力評価を可視化させるシステムを開発しており、工賃に反映させています。毎日レクリエーションも行っています。
	ナザレの村	歴史も古く、喫茶や農業など「ものづくり」を中心に事業展開をしており、当事者にあった仕事に就くことができます。
	シエンタ	看護職が代表理事として起業されています。どこの事業所でも断られて受け入れられなかった若年性認知症の方の就労継続支援を行っています。サテライト型の入居支援事業も行っています。地域の自治会にも参加するなど、地域密着型も大きな特徴です。
就労継続支援A型事業所	リール（観音寺市内）	精神障害者の方が多く働かれています（県内A型では珍しい）。レストラン以外にショートステイなど複合的福祉サービスを提供しています。
	サニーサイド（丸亀市内）	マイノリティに優しい仕事を細分化したモデルで事業を展開しています（高齢者や発達障害、子育て中の主婦など、就職にあたって弱者と言われる人たちが共生し個性が調和していく就労モデル）。（※）
就労移行支援事業所	ラ・レコルト高松瓦町	パソコンをはじめとして検定・資格取得を支援する仕組みがあります。一般就労に向けて、全国組織のネットワークを生かして、在宅就労を促進していくノウハウを持っています。
	ヒトトコ	オフ会という独自の活動をしています。地域の専門職、当事者やその家族が集います。香川県の委託を受けて、ひきこもり支援（ひきこもりサポーター養成研修も行っています）も得意分野です。
地域活動支援センター	むつみ会	香川県で最も歴史がある地域活動支援センターで、家族会も開催しています。精神疾患の利用者が多く、アットホームな施設です。
香川障害者職業センター		障害者の雇用義務の対象に精神障害者が加わっています。企業は精神障害者を雇用したいけれど、雇用できないと言います。企業との連携により、就労支援を行っている公的機関です。
ひきこもり家族会	KHJ香川県オリーブの会	ひきこもり者を持つ親たちが、定期・不定期を問わず共に集い語り合う他、講演会開催、訪問活動、親の学習会を実施、また当事者の集い「ポパイの会」を開催しています。　※K（家族）、H（ひきこもり）、J（ジャパン）
精神科訪問看護	ビートかがわ	精神科病院でキャリアを持つ看護職が、精神科訪問看護師として活躍しています。産後うつの増加などから、助産師の地域での支援、連携も求められています。

※株式会社サニーサイドの系列事業に、サンライン（NPO法人、就労継続支援A型事業所）と、サンラウンド（農業部門、農場名サニーサイドファーム）がある。複数の事業を展開しているが、学生への説明の際には、便宜上、就労継続支援A型事業所として提示した。本プログラム中では、サニーサイドとサンラインの行うホテル清掃業務見学、サニーサイドファームでの農業体験を行った。

・スライドは全体で12枚とする（必要時、18枚までは受け付ける）。
・図や写真なども用いて、視覚的な工夫も凝らすことが望ましい。
・発表時間は1グループ10分とする。他グループへの質問もしっかり行うこと。
・表紙にグループの名前と役割分担について記載する。
・特に学内演習者は、臨地見学者と連携をとり、実際に質問したいことを伝えておくこと。
・テーマを設定して調べた上で（日本のひきこもり問題と対策について、など）意見交換をして、学生としての学び、考えをまとめること。

・目安として臨地見学者による施設概要と学びが 6 枚、学内演習者が関連テーマで調べたり、意見交換をして学んだこと、今後の課題などが 6 枚とする。
・12 枚のスライドのため、単純に計算すると一人あたり 2 枚の目安となるが、それぞれのつながり、ストーリー性も考慮する。誰がどのスライドを作成したかが分かるように、スライド右肩の部分に学生氏名を記載すること。

発表会は、当初は、学生を半数ずつに分けて対面で実施予定であったが、県内の COVID-19 陽性者の増加に伴い、リモートでの実施に変更した。教員が司会進行を行い、学生が各自でスライドを提示し、発表と質疑応答を行った。発表終了後に、香川県精神保健福祉センタースタッフ、訪問事業所外の就労継続支援 B 型事業所管理者から講評をいただいた。

3. 学生の学びから

発表会終了後に、プログラム全般を通しての学びや感想などを、各自でレポートとしてまとめて提出することを課した。その中から、プログラム前後での捉え方の変化、今後の看護にどう活かしていくか、印象に残った発表の 3 点を提示する。プログラム前後での捉え方の変化、今後の看護にどう活かしていくかについては各事業所での説明・学習内容が反映されるため、事業所名と訪問・学内の別を＜＞内に示す。学生のレポートから抜粋した文章は斜体で記載している。明らかな誤りは修正しているが、文章表現は学生の記載したままである。なお、意図するところが伝わりにくい部分は（　）で筆者が補足した。

3－1. プログラム前後での捉え方の変化

プログラムを通して、精神障害者や事業所について初めて知った、イメージが変わったという意見が多くみられた。そもそもイメージがつかなかったという学生も少なからず存在していた。事業所に訪問し、スタッフから話を聞く、利用者の様子を見学することで、精神障害当事者の地域生活の具体的なイメージにつながっていることが伺えた。

・*むつみ会で「ステップアップを（無理に）求めなくてよいのではないか。」ということを聞いた時は驚いたが、利用者さんの多くが、変化することが苦手だということをよく理解されている事業者さんのお話を聴くうち、かなり納得することができた。今の自分に見合った過ごしやすい環境があるなかで、更にステップアップして自分を試したいと思うか、現状の維持を大切にして自身の環境を守るか、どちらも正しい意見である。利用者の方が「変わりたい」と思うならば就労継続支援 A 型や B 型を利用してみてそこから考えればよいし、「変わりたくない」と思うならば無理にステップアップしようとせず、現状の生活を大切にしてもらいたいと思う。＜むつみ会・訪問＞*
・*学習前後で、コミュニケーションについての捉え方が大きく変わった。学習前までは、*

利用者本人とのコミュニケーションが特に重要だと思っていた。しかし、学習を通して、家族から情報を集めたり、家族の心の支えになったり、不安を取り除いたりすることも重要であるということがわかった。＜ラ・レコルト高松瓦町・訪問＞

・就労移行支援というと精神障害者の方への情報提供や、就活のためのトレーニングを行う場所というイメージを持っていたが、それに加えて、就職後も相談支援を行ったり企業とコミュニケーションを取ったりして、利用者に合った働きやすい環境づくりと仕事の安定・継続のために支援を行っていると知ることができた。これを通して、精神障害者の方の社会復帰には、継続的な支援と人々の連携が重要だと感じた。＜ヒトトコ・訪問＞

・はじめは就労支援とは何かさっぱり分からなかったし、就労支援は働きたくない人もたくさんいて、どんな仕事をしているのかさえ分からなかった。働きたくない人たちが集まっているのかなと思っていた部分は、実際にカフェで接客してもらった際に、とても笑顔で、細かい気遣いもたくさんしていただいて、働きたくない人たちの集まりではないと分かった。その人の得意分野を活かして仕事を頑張っていることがよく伝わってきた。また、仕事の達成感によるためかとても生き生きとした笑顔であった。＜リール・訪問＞

・教科書では、障害者総合支援法の施行や精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築など、精神障害者に対する支援について、時間が積み重なっていくにつれて改善されていっているという印象を受けていた。だが、実際に施設を見学して、利用者の成長を促すためには助成金だけでなく、施設が一般の企業と同じように利益を出せるような取り組みが必要であるという、教科書だけでは知ることができなかった問題を知ることができた。＜らいおんハート・訪問＞

・学習する前は主に精神障害者が働くことに対する、先入観のようなものがあり、地域になじむことでいっぱいいっぱいで働くことは困難なのではないかと思っていたが、調べていく過程で、精神障害者の方がどのように企業で働いているのか、仕事に対しどのような不安を抱えていたのか、人と少し違う特徴をどのようにとらえ、仕事に活かしていくのかを知ることができ、次第に先入観のようなものはなくなっていった。環境さえ整っていれば就労弱者の方も企業で働くことができると学習の前後で捉え方が変わった。＜サニーサイド・学内＞

・私のグループは障害者職業センターについて調べ発表することになったため、障害者職業センターの方に話を聞く前に事前に施設について学習し、調べながら大まかな概要は分かったため細かいところを質問しようと思っていた。だが、実際に話を聞くとホームページやパンフレットに載っていることだけでなくさらに詳しい説明等を聴くことができ、全体像をつかみやすくなった。現場で働く人の声を聞いたほうがいいのだということが分かった。＜香川障害者職業センター・訪問＞

3－2. 今後の看護にどう活かしていくか

退院支援や地域移行については学内の講義でも説明しているが、事業所で具体的な説明を伺ったことで、精神障害当事者への具体的な支援内容を考える機会となっていた。特にコミュニケーションについて挙げる学生が多くみられた。また、地域で生活することは、当事者一人で完結する話ではない。当事者だけでなく、家族、事業所、地域住民等、当事者周囲の関係性にも着目することの重要性について述べている学生もいた。

- *より良い看護を提供するためには入院時だけでなく患者の退院後の生活についても考えることが必要だと感じた。退院後の生活を考えるうえで今回の見学プログラムで学んだような就労支援事業所のことなどを看護師が知っておくことが大切だと思ったので、今学んでいることをしっかりと身に付けたいと思った。＜ラ・レコルト高松瓦町・学内＞*
- *ヒトトコに勤めるスタッフの方へ「利用者とのコミュニケーションで気を付けていることはありますか。」という質問をした。回答として、利用者とその家族が必ずしも良い影響を与え合う関係であるとは限らないことを理解し、関わらなければいけないということと、家族へのカウンセリングとして悩みを受け入れ、一緒に考えるという姿勢を大切にしていると答えていただいた。この考え方は看護の場面でも必要だと感じた。患者とその家族の関係を理解し、患者だけでなく家族に対する指導やカウンセリングも行う。家庭での療養について家族に求められる知識や技術、患者との関り方で大切なことを各家族の特徴に合わせた指導方法を柔軟に考えられるようになりたい。＜ヒトトコ・訪問＞*
- *看護師に何ができるのかということを考えたが、支援の種類や当事者が住んでいる自治体ではどのような支援があるのかなどを、当事者やその家族の方に知ってもらうことが最も大切だと思った。＜ナザレの村・訪問＞*
- *医療を提供する際に、よく患者さんではなく病気そのものを見てしまうことがあると思う。しかし医療を必要としているのは病気ではなく患者さんの方なので、しっかりと患者さんと向き合い必要としているケアを随時提供していかなければならない。同じ病気でも患者さんによって痛みの感じ方も異なってくるので、コミュニケーションを取りながら行うことが大切だ。＜ナザレの村・学内＞*
- *「沈黙の時間は優しい時間」と聞いて、沈黙も大事にしたいと思ったが、きっと沈黙ができるのが怖くて、質問したり相槌で間を埋めたりしてしまうと思う。だが、患者さんのペースに合わせることは意識してコミュニケーションをとっていきたいと感じた。＜シエンタ・訪問＞*
- *精神的な障害、身体的な障害、それらを抱える人にとっての普通とは何だろうかと考えるようになった。もとの日常に戻ること、新たな日々を手に入れること、病気を抱えて生きていくこと、死について考えること、人の数だけ普通はある。精神障害だけでなく、病院を訪れるすべての人の気持ちに寄り添うことができるように、見聞を広めることは必ず役に立つと思っている。＜サニーサイド・訪問＞*
- *精神科の患者は自分の症状を過剰に表現したり、的確に伝えられない場合があるため、*

看護師が患者の状態をアセスメントしたり、少しでも異常があれば指導ナースに伝え適切に対応していく必要がある。どんな状況でも患者の状態を適切かつ冷静にアセスメントする能力がこれからの看護には必須であると考える。ちょっとした、「いつもと違う言動」や「あれ、なんか変だな」と自ら気が付けるように、日ごろから患者とのコミュニケーションを大切にし、心がけるようにしたいと思った。＜ビートかがわ・訪問＞

3－3. 学生の印象に残った発表について

発表会終了後に「どのグループの発表が最も印象に残りましたか」と尋ねたところ、「KHJ香川県オリーブの会」を挙げる学生が多くみられた。

- *香川県オリーブの会の概要と支援内容だけでなく、「引きこもり当事者や家族が相談に行かない理由」、「看護師にできること」、「なぜひきこもるのか」、「女性になぜ引きこもりが少ないのか」など分かるようで知らないことがわかりやすくまとめられていてすごく興味が持てる発表内容だったため。また、スライドも簡潔な言葉で文字数も少なくまとめられていてすごく見やすかった。*
- *このグループを選んだ理由としては、第一に、後半からの引きこもりについてのところが、看護師にできることや問題とその対策まで述べていて分かり易かったからである。看護師になる私たちだからできることを述べてくれていたので、実習の時や今後にも役にたつし、参考になると感じた。第二に、パワーポイントの見やすさ、そして分かり易さである。スライドの資料には、たくさんの絵やグラフなどが盛り込まれており、見ている人が発表に集中することができたと思う。伝えたいことが簡潔明瞭であり、色を統一しているところもいいところだと感じた。*

報道等で取り上げられる「引きこもり」は若年者の場合が多いためか、引きこもりに40歳代以上が多いことを知らなかった・驚いたという意見も多くみられた。大学生は「メンタルヘルス問題を抱えると、学生生活への影響も大きく、不登校やひきこもりのリスク要因となるため、早期発見や治療が重要である」とされるように（三宅ら、2015、1360-1366頁）、大学生のメンタルヘルスにおいて引きこもりは大きな意味をもつ。問題が目に見える形として表れることもその一因であろう。引きこもりを自分の身近な問題として考えていることが伺われた。

また、「農福連携」に実際に取り組んでいる「らいおんハート」「サニーサイド」の2事業所の発表が印象に残っているという学生も多かった。

- *「農業」という取り組みは他のグループにはなかった焦点だったため、とても印象的だった。思いっきり遊ぶことのできる機会を提供することで、楽しみながら仕事に取り組めるということや、その人の長所や得意なことを活かした取り組みができるといったような発見が面白かった。また、写真や図などをうまく活用していたり、重要なポイントが見やすく、視覚的にわかりやすい資料、発表だったと感じるから。*
- *農作業を取り入れることで就労支援を行なっているという独自性に惹かれたからだ。特*

に、利用者さんの能力評価を可視化させるシステムが印象に残り、これを応用させれば病院や他の施設でもとりいれることができるのではないかと感じた。農業だけでは、偏りが出るからと、内職を取り入れたり少し遊びの要素を取り入れているところにも、施設の深い想いや丁寧さが伝わってきた。

・ *サニーサイドでは、二つの取り組み、施設が紹介されていましたが、特にサニーサイドファームでの取り組みが印象に残っている。質問に対し、解答が無く、農業を行うということが中心であるということが分かった。精神障害者との区別が最もされていない施設のように感じた。*

（訪問した学生が、「①周りからの目やマイノリティ（障害を持つ方）と共生しともに働く中で大変だったこと、②マイノリティに対する向き合い方、③この事業を始めようと思ったきっかけの 3 点をスタッフに質問したが、美味しい野菜を作るという「職業」として、誰が苗を植えても同じ結果になるようにという姿勢で農業に取り組んでいるため、答えはほぼ返ってこなかった」ことを発表していた）

農福連携の取り組みは、学生にとって普段学習する看護の座学とは大きく異なる内容であり、新鮮に感じ印象に残りやすかったことが考えられる。農福連携は、様々な効果が期待される反面、課題も多いことが報告されている。本田ら（2018、257−262 頁）は就労継続支援にもとづく農福連携の現状について、「事例調査を通して、A 型、B 型にかかわらず、福祉分野の要因（障害の種類と障害者の高齢化）と農業分野の要因（作業場所、栽培方法）にもとづいて障害者への配慮が行われていること、および A 型事業所では、障害者が「労働者」とみなされ、一定程度の作業能力・対人関係能力のある障害者に限定され、職員の負担は軽い一方、B 型事業所では障害者が「支援対象者」とみなされ、幅広い障害者が利用できるものの、職員の農業従事負担が重い」と述べている。学生の発表の中には農福連携に関する利点には触れられていたが、課題については言及されていなかった。今一歩踏み込んだ調べ学習をどのように促すかの課題点である。

これまでに挙げた事業所等に共通する点として、独自のホームページを有しており、理念等が明示されている点がある。

・ *それぞれの施設のホームページを見てみたが、筆者も行ってみたいとおもうような様々な工夫がされていた。いきなり施設見学を行うことは難しいかもしれないが、ホームページや資料を見て、精神障害者の行ってみようかな、やってみようかなという気持ちを引き出すことも大切であるなと思った*

学生はインターネットを使用して調べることに慣れている。見学時には理解しきれなかった点があったとしても、後から振り返って確認し、考えることができるため、発表資料の充実に繋がった可能性がある。

前述の事業所に関する、学生の作成した発表資料の一部を提示する（図 2）。実際の資料には作成した学生の名前が記載されていたが、学生名を削除するとともに、資料内のデータについて出典の記載がないものは筆者が追加した。

なお、印象に残った理由として、

- 各々が調べたことに対して、自分がどう思ったのか、感じたのかも合わせて発表出来ていて、素晴らしいなと思ったから。また、学んだことが丁寧にまとめられていて、全体として見やすく、ききやすかった
- スライドもシンプルで見やすく、最後に今後の問題が記載されており、全体のまとめとしてとてもわかりやすかったため

といった「発表会でのプレゼンの仕方」を挙げている学生も多く、決して各事業所等の取り組みの優劣を示すものではないことは申し添えておく。

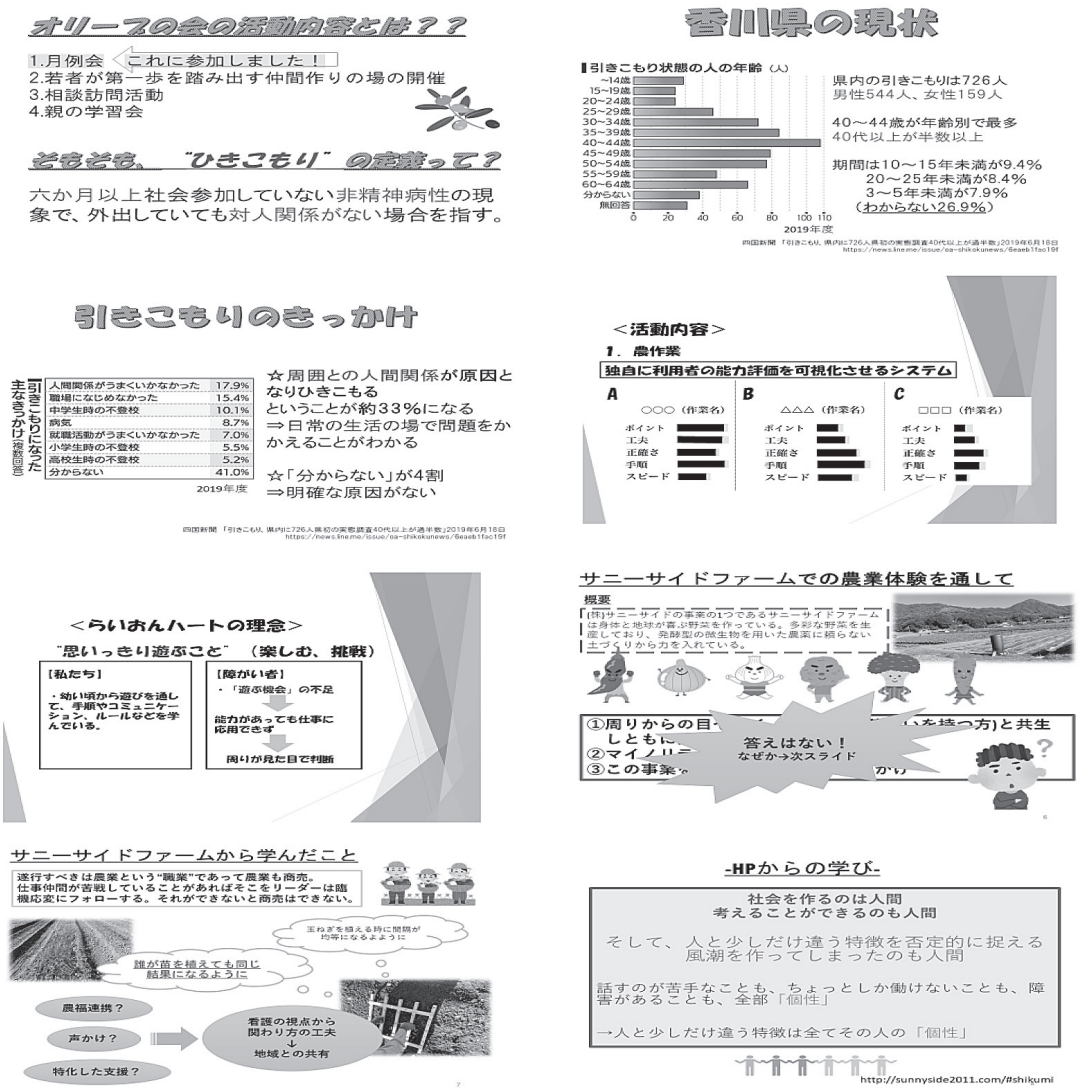

図２　学生の作成した発表資料（一部抜粋、各資料は連続したものではない）

4. 2020 年度訪問プログラムを振り返る

4 ー 1. 学生の学びから見えてきた学生の状況

2020 年度は全 11 事業所に協力をいただいて訪問プログラムを実施した。地域活動支援センター、就労移行支援事業所、就労継続支援 A 型・B 型事業所、精神科訪問看護など、様々な種別の事業所に協力いただいたことで、発表内容も多彩なものとなり、事業所ごとの類似点・相違点について述べている学生も多かった。

・ *私は就労継続支援 B 型の施設、シエンタさんについて調べていたのですが、資料作成中は、就労継続支援 B 型施設はどこも同じような考えのもと同じような支援を行っていると思いながら作っていたのですが蓋を開けてみるとそれぞれの施設で考えや支援の内容まで三者三様だったのがとても印象的でした。*

訪問した学生においては、自分が体感した事業所等の雰囲気、空気感について述べていた。接客や販売が業務内容に含まれる事業所では実際にサービスを利用してみることでより多くのものを感じ取ることができると考えられる。

・ *今回非常に遠い場所ではあったのだが就労継続支援 A 型の実際について見ることができて非常に良かった。なぜなら、実際に目で確認しなければ、利用者さんがどのように働いているのかが分からなかったからである。このことによって、精神疾患を持った患者さんの働くことができる幅を知ることができたのでこれを踏まえて看護を行っていくことができると考える。*

リモートでの説明の場合でも、その場の雰囲気を感じ取ることは可能であった。

・ *私自身は、ラ・レコルト高松瓦町を Zoom で見学させていただいたが、利用者さんの様子も見学することができた。そこから、利用者さんどうしもとてもフレンドリーな雰囲気で助け合いを行っていたり、施設の職員の方と利用者さんもたくさん会話されていたりして、想像していた雰囲気とは全く違っていたためとても驚いた。私はもっと暗かったり、あまり会話などは無さそうだと思っていたが、助け合いもたくさん行われ、会話もされており、その雰囲気が利用者さんのやる気にもつながっているのではないかと思った。*

また、学生の反応からは、訪問前の事業所等のイメージとして「暗い」「殺伐とした感じ」といった表現がしばしば用いられており、障害者支援に対してどこかネガティブなイメージを持っていることが伺える。報道等での取り上げられ方の影響もあるであろう。

・ *ニュース等で取り上げられる際には、暗いニュースが多く、施設員の虐待のニュースを聞いたことがある。これらが施設へ暗い印象を与えていると考えるために、医療に関係のない人にも良い印象を持ってもらえるような情報提供が必要であると考えた。*

その他、下記のように、精神障害者に資格取得や業務遂行は難しいと思っていたという意見も少なからずみられた。学生が、障害者にできることは少ない、自分とは違う存在である、というイメージを有していることが伺われる。

・ *まず驚いたことは、MOS 資格という word や excel のスキルを証明する資格を取得して*

事務作業をすることができる方がいるということである。

- *就労には資格が役立つが、精神障害者が資格を取るのは難しいと思っていたので、その資格を就労支援の事業所で受けることができるのかととても驚いた。*
- *障害を持つ方のできることの多さにも驚いた。障害を持つ方の作業といえば、箱折りや袋詰めなどの作業方法が決まっているものばかりだと思っていた。*
- *私は施設見学を行うまで、「利用者の方は1人で作業を行うのは難しいだろう。」、「誰かが横で指示や指導をしてくれていたら動けるかもしれない。」、と思っており、利用者の方の主体的な取り組みへの期待は薄かった。また、障害者と聞くと特別な感じがして、健常者が行う作業の難易度より低い作業で、慣れた作業を繰り返すイメージがあった。*
- *就労支援事業に対してあまり多くの目につかないような工場などでの労働が多いのだろうというイメージを持っていた。しかし実際に見学してみると、介護施設や食品のテイクアウト店など、多くの人と関わり得る場所で労働しており、非常に驚いた。*
- *実際に施設を見学して、働いている姿を見て、また施設の方から「お給料で鬼滅の刃のグッズを買うことを楽しみに働いている子がいる」という話を聴いて、自分や自分の周りにいる人たちと共通したところを知ることができ、身近に感じた。*

学生がこうしたイメージを持っていることを前提に、精神看護において重要な、当事者の持つ強みに着目した支援を考えるための教育方法を検討しなければならない。櫻井ら（2020、273-281頁）は、精神障害者に対する偏見を低減するための効果的な介入は、「精神障害者と「共に作業」することと、普及啓発活動」と述べている。3年後期に行われる精神看護学実習で初めて精神障害者と関わるという学生も多く、知識がないことからネガティブなイメージを持つことが考えられるため、学生への意識づけが重要である。下記の意見も、学生が意識して関わることで変化することを示すものである。

- *これまで、何も思わずに通っていた道に、施設があったことに気づくことができたりと、自分自身がどれだけ狭い視野で生きていたかを気付かされた。*

また、学生が興味関心を持つことで、自発的に調べてみたり、家族と話をしたりする行動も見られた。地名・事業所名は削除している。

- *就労支援施設や就労移行支援事業所、就労継続支援施設と聞いて都会ではない香川県には少ししかないと思っていた。だが、施設訪問の話を聞いてたくさん紹介されたとき、高松市の施設が多く紹介されており、（高松市だけでこんなにあるんだ。）と感じた。高松市だけでこんなにあるのだから、地元である〇〇町も調べてみようと思った。〇〇町には、就労継続支援の「就労継続支援B型　△△」があることを知った。*
- *母は、「らいおんハート」で作られている野菜を以前からスーパーで買っていたそうだが、就労継続支援B型で作られたものだとは知らなかったそうだ。まずは自分の周りから施設のことを広めていけば認知度も上がるのではないかと考えた。*

発表会に関しては、開催数日前に学生からの申し出を受けて急遽リモートに変更したが大きなトラブル等はなく終了した。

・*このプログラムの発表会は、Zoom で実施されたが、Zoom を使っての発表は初めてであったため、戸惑う部分もあったが、無事発表を終えることができて、また他のグループの発表もよく聞くことができた。今までは対面での発表しか行ったことがなかったため、このようなスタイルでの発表はとても貴重な経験になったと思う。*
・*Zoom での発表は今回授業が初の取り組みであったが、グループメンバーそれぞれがスライドを提示する係、冒頭・締めくくりのあいさつを行う係などをあらかじめ決めて対応していたり、日ごろから他の授業で Zoom を用いることが多く皆操作に慣れていたことから大きなアクシデントも起こらず無事発表を終えることが出来た。*

2020 年度は前期からリモートでの講義が実施されるようになり、発表会を行った 12 月の時点で、学生もある程度は「遠隔講義を受講すること」に慣れていた。各自の自宅等から発表することになるので、全て各自で対応が必要であり、トラブル等が起こっても教員は対応できないことを事前に伝えており、学生も聴講者としてだけでなく、発表者としての役割を担うことを意識していた結果といえる。

4 － 2. 2020 年度のプログラムの総括

2020 年度のプログラムは COVID-19 の流行に伴い、現地に訪問する学生を半数とし、残りの学生には学内で調べ学習を進めてもらうこととした。調べる内容に関して、ある程度の課題提示は必要ではあったが、社会的な問題や現状を踏まえて、事業所がどのような取り組みをしているのかが整理され、学習効果が高まったのではないかと考えられる。

大学構内に立ち入り制限が設けられていた時期に訪問の予定だった事業所も数ヶ所あり、事業所・学生双方の感染リスク軽減のため、急遽リモートでの対応に変更依頼した。事業所側で対応いただいた事例、教員のみが事業所に赴きそこから配信した事例と、事業所の状況に応じて対応を変えたが、こうした事態も想定しておくことが必要であった。COVID-19 の影響を受けて、対応を少しずつ変えながらではあったが、大きな問題なくプログラムを終えることができた。実際に訪問する、もしくは学内で調べ学習を行い、両者を統合して発表する、という一連のプロセスを通して、学生は学びを深めることができており、訪問プログラムの目的は概ね達成できたと考える。

今回は学生の記録から振り返る形でプログラムの評価を行ったが、今後は数量的な評価方法の検討も必要である。

5. おわりに

精神障害者の地域移行・地域定着を支援する際に、居場所・働く場所の確保は必須といえる。精神科病院の入院患者数や在院日数はわずかずつではあるが減少傾向にあるものの（厚生労働省、2017b）、長期入院が問題になって久しい。地域移行を進めて行く際に、「患者には無理、できない」と看護職者が考えてしまう、看護職者の施設病も指摘されている。

今回の結果を見てみても、訪問・学習を通してイメージが変わった学生が多く存在しており、訪問プログラムの効果といえるが、障害者はかくあるべしといった障害者像をどこかで持っていたことを示す結果ともいえる。各事業所等に訪問することは、制度や活動についての学習だけでなく、看護職者自身の考えを振り返る機会ともなりうる。病院と地域のシームレスな看護、精神障害者のリカバリーに向けた看護の提供のために、知情意すべてを研鑽していくことが求められる。

謝辞

コロナ禍の最中にも関わらず、本プログラムにご協力くださった皆様に深謝申し上げます。本プログラムの一部は株式会社サニーサイドの支援を得て実施しました。

参考文献

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2017）『看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～』（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf）＜ 2021 年 5 月 18 日アクセス＞

遠藤淑美著、岩崎弥生・渡邉博幸編（2019）「精神障害をもつ人とのかかわり方」『新体系看護学全書　精神看護学②精神障害をもつ人の看護』メジカルフレンド社。

本田恭子・渋谷直樹（2018）「就労継続支援にもとづく農福連携の現状―岡山県と大分県を事例に―」『環境情報科学　学術研究論文集』32、257-262 頁。

厚生労働省（2004）『知ることからはじめよう　みんなのメンタルヘルス　精神保健医療福祉の改革ビジョン』（https://www.mhlw.go.jp/kokoro/nation/vision.html）＜ 2021 年 5 月 18 日アクセス＞

厚生労働省（2017a）『これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会報告書』（https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000152026.pdf）＜ 2021 年 6 月 2 日アクセス＞

厚生労働省（2017b）『知ることからはじめよう　みんなのメンタルヘルス　精神疾患のデータ』（https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/data.html）＜ 2021 年 5 月 20 日アクセス＞

三宅典恵・岡本百合（2015）「大学生のメンタルヘルス」『心身医学』55（12）、1360-1366 頁。

櫻井友実・橋本健志・四本かやの（2020）「日本における精神障害者に対する偏見の文献検討」『作業療法』39、273-281 頁。